

平成 29 年 5 月 23 日現在

機関番号：14101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26381025

研究課題名(和文) ライフストーリーアプローチによる教師の「熟練性」の研究 - 「二重の応答性」の発達 -

研究課題名(英文) Research of teachers' proficiency-development of "doble responsibility#

研究代表者

森脇 健夫 (MORIWAKI, TAKEO)

三重大学・教育学部・教授

研究者番号：20174469

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の課題は教師の「熟練性」を「二重の応答性」に着目し、その発達の過程をライフストーリーインタビューをもとに明らかにすることである。初任期の教師の場合、指導事項を効率的に教えないといけないこと、学習者の理解や学習のプロセスの理解が困難なことから、教えたことに対する学習者の反応への教師の反応に稚拙さが見られる。的確な反応ができないばかりか、反応そのものがない、という事態も見られた。これに対し、中堅、熟練期の教師は、1時間に教える事項への認知だけでなく、単元、カリキュラムへと認知が広がり、一方で学習者、学習過程への理解が深まる。「二重の応答性」もタイミング、その内容も的確さを増していく。

研究成果の概要(英文)：The subject of this research is making the process of the development clear based on a life history interview at "a double response" paying attention to the teacher's "skill nature." In the case of the teacher of the first term of office, childishness is looked at by the reaction of the teacher to a student's reaction to having taught from that an instruction matter must be taught efficiently and an understanding of a student and an understanding of the process of study being difficult. On the other hand, cognition spreads not only to the cognition to the matter which the backbone and the teacher of a skillful term teach in 1 hour but to a unit and a curriculum, and an understanding to a student and a learning process deepens by one side. "The double response" increases timing and the contents also increase accuracy.

研究分野：教育方法学 教師教育学

キーワード：教師の熟練性 ライフストーリー 二重の応答性 教師の発達 初任期教師 熟練教師

1. 研究開始当初の背景

教師の熟達研究については、近年、技術的熟達者モデルから反省的実践家モデルへの転換に伴ってあらためて重要な研究課題として浮かび上がってきている。熟練教師の「熟練性」とは何かということについて、熟練教師と初任教師の実践的思考様式の比較研究(佐藤・秋田 1991)や比喻生成課題による教師の教える経験に伴う授業イメージの変容研究(秋田 1996)などの研究によって、(1)即興的思考、(2)不確実な状況への主体的な関与、(3)多元的思考、(4)文脈に即した思考、(5)発見的反省的な問題構成の方略などの熟練教師の思考様式の特徴が明らかにされている。

また、教師歴が長く知識や技術、信念が確立した教師ほど、教師主導型から学習者の自律性を目指した授業へと移行し、授業観・学習者観の変革が起こることが明らかにされている。しかしながら、各々の教師においてどのような経験をきっかけに、信念の変容が起こり、方法・技術の整合性が再構築されていくか、については研究がまだ十分でない。

これまで著者はライフヒストリー的アプローチによる教師の授業スタイルの形成過程を明らかにするため事例研究を積み重ねてきた。授業スタイルとは、その教師が授業を構想し、教材づくりや授業を行う際に見られる特徴のある「一貫性」である(森脇 2007)。

ライフヒストリー的アプローチとは、教師の「語り」を一つの基本資料にしながらも、教師自身の実践記録や分析者の観察記録など、データを多面的に採りながら、教師としてのカリキュラム経験と授業変革の歴史を、授業事実のレベルで丹念に洗い出そうとする試みである(森脇 2009)。

これらの事例研究の研究過程で、熟練教師と初任教師の授業におけるふるまいの大きな違いとして、両者に機能する「二重の応答性」の内容と質の違い、という点に注目するに至った。「二重の応答性」とは、もともと医療分野で、患者が生活世界に応答しようとしていることに医療従事者が「応答」していく様をあらわしている(平山、松下 2006)。平山らによれば、理学療法士の臨床実習を観察していると、学生たちと患者の関係性は、(a)学生は患者に対して理学療法を提供する患者からの拒絶を受ける。(b)(患者の)身体反応を感じることができるようになる。(c)患者が新しい身体と生活世界との再構築へと応答していることに気づき、その応答に理学療法士として応答しようとする。「二重の応答性」を獲得することによって、初めて患者に医療従事者が受け入れられていくのである。

「二重の応答性」の獲得は教師のキャリア形成の世界においても起こる。その過程は以下の通りである。(A)自分の持っている知識、そして、教材研究をして得た知識をわかりや

すくかみくだいて教えようとする(一方的、伝達的な段階)。(B)学習者の反応(言語的身体的反応)を感じ取れるようになってくる。(C)学習者が自らの文脈に沿って、例えば生活知と結びつけながら理解(応答)しようとしているのを支援(応答)することができるようになる。

「二重の応答性」の発達から初任期から熟練期の教師の成長と発達を跡づけることができるならば、その成長を促す契機を明らかにし、その契機となるような経験を教師ができるようなプログラム等の開発も射程にいけることができる。

2. 研究の目的

教師の熟達化においては、理学療法士の「二重の応答性」の獲得と同じような過程を辿るが、違う要因も働く。(1)教師は子どもを育てると同時に文化の伝達という仕事を行わなければならない。(2)学習においては児童・生徒が相手なので、コミュニケーション能力の未熟な学習者の応答をキャッチしなければならない。(3)一対一の仕事ではない制約、逆にいえばメリットもある。患者一人を相手にすればいい理学療法士とは異なり、教師は対全体を常に意識していなければならない。一人に対するきめ細やかな対応には限界がある。だが、一方で学習者どうしの関係性を利用できるという点においては利点にもなる。

「二重の応答性」を獲得するには、自己変革の必要性、生徒の状態を把握する方法の獲得、応答の方法の獲得、といった過程が必須である。初任者においても学習者の応答の予測や反応という形で「二重の応答性」は未熟な形態で存在する。しかしながら熟練教師の「二重の応答性」はその配慮が教室全体に行きわたり、しかも瞬時的に確かな判断をしながら応答する。空間的な認知と同時に時間的な認知(時間配分予測等の修正)を行っている。つまり「二重の応答性」もその内容と質を発達させている。

本研究の研究目的は以下の二点である。一点目は、「二重の応答性」の発達を初任期教師と熟練教師の授業の場面において跡付けることである。二点目は、熟練教師の「二重の応答性」の発達の過程をライフヒストリーインタビューによって明らかにすることである。また、「二重の応答性」に関する教師の思考の顕現化にもとづくプログラム作成も行いたい。

3. 研究の方法

研究の目的に応じて、大きくは二つの方法がとられる。一つは、初任期教師と熟練教師の授業観察及び授業の後に行われる授業者との対話的インタビューである。もう一つは、熟練教師のライフヒストリーインタビュー

である。熟練教師の力量は、どのように獲得されるのであろうか。おそらく「学習主体の再発見」といった経験や自らの信念の問い直し、方法や技術の再構成といった一連の過程が必要とされるだろう。そのことを熟練教師の授業参加・観察、またライフヒストリーインタビューによって明らかにしたい。なお、本研究は基本的には事例研究という形態で行われる。事例研究としての意義や課題、方法論の洗練化についても一方で課題となる。

4. 研究成果

主な研究成果は、次の二点である。

一つは、初任期教師の「二重の応答性」の在り方を内から支える思考過程を明らかにできたことである。ある初任期の教師は、理科の授業において、子どもから想定していなかった実験結果が出されたとき、授業においてスルーをしてしまった。スルーをした理由をインタビューで尋ねたところ、「うまく説明ができない」からという答えが返ってきた。授業は教師が準備していた最後のまとめを貼って終わったが、まとめとは真っ向から対立する子どもたちの実験結果は無視されてしまった。無視されたことの否定的な意味（つまり実験そのものが意味がない）は考慮されることはなかった。準備した指導案をどのように実現していくか、に意識が囚われることによって子どもたちの思考や活動へのリスペクトや対話が軽視されてしまうということが起こってしまった。「二重の応答性」の観点から見ると、子どもたちの反応への反応ができない状態であり、「二重の応答性」自体が瓦解してしまっている。こうした思考のプロセスをも含めてPBLの対話的テキストとして表現することができた（大西、森脇2017）。

もう一つは、質の高い「二重の応答性」を可能にするものとして目標概念が大きくかわっていることを明らかにした点である。熟練教師のライフヒストリーから明らかになったことは、熟練教師は、授業を行う際に、単に一時間の授業目標だけではなく、単元の目標、一年間の目標、また教科の目標、さらには人間形成の目標まで多層的な目標構造を有しており、学習者のレスや想定外の「出来事」に対してさまざまな層の目標と対応させながら対応（「二重の応答」）を行っているということである。さらにこうした目標の多層化が、熟練教師の経験として一授業者としての経験だけではなく、教務主任や学習者と違う形でつきあう（進路指導等）経験が契機になって起こることも明らかにされた。教師のキャリア形成は、仕事の幅を広げるだけではなく、自分自身の授業の在り方も変化させていくことが明らかにされた。（康、森脇、坂本 2015）

今後、事例研究を重ねていく形で、目標構

造の多層化という仮説がどの程度、普遍的な事象として起こっているのか、さらにはそれが「二重の応答性」の質を高めていくのにどのように貢献しているのか、さらに探究を進めたい。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 7 件)

1. 森脇健夫・康鳳麗・坂本勝信, 教師の「熟練性」の研究 2 人の中堅中国人日本語教師の授業の比較分析を通して, 三重大学教育学部研究紀要(査読有), 第 68 巻, 355-367, 2017
2. 大西宏明・森脇健夫, 「教えること」についての「観」の自覚と変容, 三重大学高等教育研究(査読有), 第 23 号, 15-24, 2017
3. 根津知佳子・山田康彦・森脇健夫 (他 6 名), 教員養成型 PBL 教育における対話的事例自成夫教育の評価方法の開発, 三重大学高等教育研究(査読有), 第 23 号, 69-80, 2017
4. 森脇健夫, 活用型授業(学習)の意義と課題, 三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要(査読無), No. 35, 7-12, 2015
5. 康鳳麗・森脇健夫・坂本勝信, 日本語教師の「熟練性」の研究 熟練教師の目標概念の多層性、ネットワークと機能に注目して, 鈴鹿医療科学大学紀要(査読有), No. 22, 31-44, 2015
6. 森脇健夫, 教科書, 『教育方法学研究ハンドブック』, 日本教育方法学会編, 142-145, 学文社(査読有), 2014
7. 坂本勝信・康鳳麗・森脇健夫, 中国の日本語学習者の物語描写における視座形成の実態, 常葉大学経営学部紀要(査読有), 第 1 巻第 1 号, 77-86, 2014

〔学会発表〕(計 5 件)

1. 大西宏明・森脇健夫, 「対話的事例シナリオ」による教員養成型 PBL 教育の評価と改善, 日本教師教育学会第 26 回研究大会, 2016 年 9 月 18 日, 帝京大学(東京都八王子市)
2. 康鳳麗・森脇健夫・坂本勝信, 「絵単語」を使った中国語初級指導の効果, 中国語教育学会第 14 回全国大会, 2016 年 6 月 5 日, 日本大学(東京都千代田区)
3. 康鳳麗・森脇健夫・坂本勝信, ライフヒストリー的アプローチによる熟練日本語教師の「熟練性」の研究 「見えない目標」の形成と機能に着目して, 日本語教育学会 2015 年度秋季大会(ポスター発表), 2015 年 10 月 10 日, 沖縄国際大学(沖縄県宜野湾市)
4. 森脇健夫・大日方真史, 教員養成型 PBL 教

育における対話型事例シナリオの到達点
と課題,日本教師教育学会第 25 回研究大
会,2015 年 9 月 19 日,信州大学(長野県
長野市)

5. 森脇健夫, 教員養成型 PBL 教育の理論
的・実践的到達点と事例シナリオの位置,
第 21 回大学研究フォーラム,2015 年 3 月
14 日,京都大学(京都府 京都市)

〔図書〕(計 1 件)

1. 康鳳麗・坂本勝信・森脇健夫, フレーズ
学ぶ はじめての中国語,総ページ数 112
共同作業のため担当箇所抽出不能,三恵
社,2015

6. 研究組織

(1)研究代表者

森脇 健夫 (MORIWAKI, Takeo)
「三重大学・教育学部・教授」

研究者番号：20174469

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者

()